

2015年度 No.2 2015年10月31日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局
 〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 中央大学文学部 森茂岳雄研究室
 TEL/FAX：042-674-3852 E-mail：jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp

Website：http://www.kokusairikai.com/ Facebook page：日本国際理解教育学会facebook

目次

会長挨拶
 第25回研究大会を終えて
 第25回研究大会公開シンポジウム報告
 第25回研究大会・特定課題研究報告
 第25回研究大会参加記
 2015（平成27）年度総会報告
 2014（平成26）年度事業報告
 2015（平成27）年度事業計画

1 研究・実践委員会報告
 2 紀要編集委員会報告
 3 国際委員会
 4 理事会報告
 5 博学連携事業報告
 6 事務局通信
 6 事務局からの連絡とお願い
 8

10
 10
 11
 11
 12
 13
 14

【会長挨拶】

2015年（節目の年）を終えるにあたって

会長 藤原 孝章

今年もあと残すところ二ヶ月となりました。2015年は、何かと節目の年でした。第二次世界大戦終結（戦後）70年、日韓国交回復50年、国際協力（青年海外協力隊発足）50年などです。過去をさかのぼるだけでなく、未来を見据えてみても、昨年（2014年）の国連ESD10年計画の終結に続く、国連ミレニアム開発目標（MDGs）の終わりの年でもあり、Post 2015年が議論されています。さらには、今国会で成立した日米の集团的自衛権等を規定した一連の安保法制は、日本の未来への歴史の大きな転換点を画すものものです。

日本国際理解教育学会は、直接的な政治的コミットメントは控えていますが、国連やユネスコの勧告、日本政府の国際化やグローバル化政策、総合的な学習の時間や外国語や道徳の教科化など教育課程の変更にもなう内外の教育課題については、研究や教育実践の立場から応答してきました。

私は、本学会が編纂した学会設立25周年記念出版『国際理解教育ハンドブック』（2015年、明石書店）の第1章「国際理解教育のパースペクティブ」において、グローバル／インターナショナル（世界、地球、国連など）、ナショナル（日本政府、文部科学省など）、ローカル（地域、足元、学校など）、インディビジュアル／パーソナル（個人、学習者、実践者など）という四つの視点から国際理解教育を規定することができると思いましたが、これについて少し補足させてほしいと思います。

『ハンドブック』では、四者四様の定義が別個に並列しているような印象を与えていますが、すべてが国際理解教育の視点であり、四者は空間的にも（横に見ても）次元としても（縦に見ても）重層的であり、かつ、親和と相克を内包する動態的關係にあります。

今年は節目の年であり、国際的にはポストESDとMDGsにかわるSDGs（持続可能な開発目標）やGCED（グローバルシティズンシップ教育）が今後の教育課題として浮上しています。

ナショナルには「グローバル人材」と関連してグローバルリーダー育成の教育課題がスーパー・グローバル・ハイスクールや国際バカロレア教育課程の設置に具現化され、学習指導要領の改訂に伴う外国語（英語）や道徳の教科化が学校現場における実践の課題になってきています。

四つの視点は、グローバルやナショナルの教育課題に振り回されるローカル（学校現場、地域）や個人を意味していません。ユネスコが①知るための学習、②なすための学習、③共に生きるための学習、④人間存在を深めるための学習、の四本柱に加えて、ESD10年の間に、⑤自己変容と社会変容のための学習を加えたように（『ハンドブック』永田佳之、206頁）、むしろピラミッドの底辺（足元、現場、あるいはグラスルーツ）から、すなわち教員個人々が自己の変革や社会の変革を意識した地平から、グローバルな動き、ナショナルな政策を批判的に吟味することを意味していると考えられるものです。

第25回研究大会（中央大学大会）を終えて

研究大会実行委員長 森茂 岳雄

日本国際理解教育学会第25回研究大会が、2015年6月13日（土）・14日（日）に中央大学多摩キャンパスで行われました。当日は、全国から230名の会員・非会員の皆様の参加を賜りましたことを心から感謝申し上げます。大会直前に、韓国でMARS感染が拡大し、韓国からの発表者の何人かが参加できないとの連絡を受け心配しましたが、韓国を含め海外からも15名（韓国9名、中国6名）の参加者がありました。その他、公開シンポジウムの参加者を含めると2日間でのべ500名以上の参加がありました。

折しも本年は、第二次世界大戦後70年に当たり、同時に「ユネスコ憲章」が採択されて70年の年にも当たります。また本年は、日韓国交正常化50年の年でもあります。このような折り返しの年に、創設130年を迎えた中央大学で学会創設25周年記念の研究大会が開催できたことは光栄の至りです。大会の懇親会では、日韓国交正常化50年を記念して、韓国民団神奈川県本部農楽隊によるサムルノリの演奏も行われました。

本研究大会では、75件の自由研究発表の他、公開シンポジウム「グローバル・シティズンシップの育成と国際理解教育」、特定課題研究「国際理解教育における実践研究のモデルを探る」に加え、研究大会として初めてポスターセッションのコーナーを設けました。自由研究発表ではどの会場も多くの聴衆で埋まり、参加者数、研究発表数において、過去最大の研究大会になりました。自由研究発表のテーマは、ユネスコ研究、ESD、地域、グローバル・シティズンシップ、多文化共生、外国語活動、メディア・ICT、ことばとからだ、平和教育、アフリカ、海外研修プログラム等々と多岐にわたり、学会の四半世紀の研究の成果を踏まえ、外国からの発表も含め新たな研究のステージへの飛躍が感じられました。



日韓国交正常化を記念した懇親会でのチャンクの演奏

公開シンポジウムでは、近年「グローバル人材の育成」の議論を背景に、グローバル社会に求められる資質・能力をどのように育成するかを焦点に活発な討論が行われました。また、特定課題研究では、3年間の共通テーマ「国際理解教育における教育実践と実践研究」の第2弾として、学会が連携して研究を進めている学校と地域の実践事例が報告され、活発な討論が行われました。

研究大会の開催に合わせて、学会創設25周年記念出版物として、学会の新たな研究と実践の集大成である『国際理解教育ハンドブッカー・グローバル・シティズンシップを育む』（明石書店）も刊行されました。

最後になりましたが、本研究大会の開催に当たっては、八王子市、東京都教育委員会、八王子市教育委員会、八王子国際協会、中央大学から後援をいただきました。また公開シンポジウムにつきましては、中央大学との共催という形で開催させていただきました。また、本研究大会の準備・運営に当たりましては、中央大学の職員、大学院生、学生20名の他、隣組のよしみで帝京大学の中山京子先生はじめ学生のみなさま12名、及び埼玉大学の桐谷正信先生にご協力いただきました。以上、記して感謝申し上げます。

本研究大会が、学会の次の四半世紀に向けての新たな飛躍の大会になったことを願ってやみません。



はじめてのポスターセッション



どの会場も盛況だった自由研究発表

第25回研究大会公開シンポジウム報告 ーグローバル・シティズンシップの育成と国際理解教育ー

研究大会実行委員長 森茂 岳雄

近年、日本では21世紀の教育政策課題として「グローバル人材の育成」があげられ、高等教育を中心に、経済界や各省庁が一丸となって改革を進めてきている。そこで求められているのは、「世界に勝てる真のグローバル人材」（日本再興戦略）であり、「経済社会の活力の維持・向上に貢献できる人材」（経団連）である。このような今日の教育改革に対して、ユネスコはポストESDの教育課題として平和、人権、民主主義、寛容、持続的発展等の価値を重視したグローバル・シティズンシップの育成を打ち出した。

そこで本シンポジウムでは、もう一度グローバル社会に求められている資質・能力とは何かを問い直し、そのような資質をどのように育てるかについて、グローバル時代の教育モデルとされているIBスクールやスーパーグローバル・ハイスクール、グローバル人材育成に取り組んでいる大学、グローバル競争力の育成が叫ばれている韓国における具体的な教育実践の検討を通して問い直すことを目的とした。

シンポジウムは中央大学との共催で行われ、武石智香子中央大学副学長・国際センター長の開会挨拶に始まり、藤原孝章学会長（同志社女子大学）及び森茂岳雄（中央大学）の司会で、4人のシンポジストの報告を受けてディスカッションによる問題提起の後、会場を交えて討論が行われた。

まず、石森広美氏（宮城県仙台二華高等学校）は、スーパーグローバル・ハイスクールに採択された同校での自身の実践である「世界の水問題」の実践を例に、同校がめざすグローバル・リーダーとして身につけさせたい五つの資質・能力として、適切な世界観、共感する力、相対化する力、本質を見抜く力、構想力をあげ、それを育成する取り組みとして課題研究、フィールドワーク、言語活動の重要性を指摘した。

次に、山本勝治氏（東京学芸大学附属国際中等教育学校）は、国際バカロレア（IB）認定校である同校において掲げているIBの10の学習者像として、探求する人、知識のある人、考える人、コミュニケーションができる人、信念を持つ人、心を開く人、思いやりのある人、挑戦する人、バランスの取れた人、振り返りができる人をあげ、それを育成するための逆働き設計の単元計画について自身の世界

史の授業実践を通して提案した。

第三に、若林茂則氏（中央大学文学部）は、グローバル人材育成推進事業に採択されて現在様々な取り組みが進行している中央大学における育成すべき人材像として、グローバル・ジェネラリスト、グローバル・リーダー、グローバル・スペシャリストをあげ、それをコンピュータ上で自己評価・振り返りのできる仕組みであるコンピテンシー尺度C-compassに「多様性創発力」を加えた指標の開発、及び中央大学SENDプログラムの実践について報告した。

最後に、韓国国際理解教育学会会長の韓健洙氏（江原大学）は、韓国政府の教育におけるグローバル競争力の強化政策について様々なデータをもとに紹介するとともに、現在そのための世界市民教育が進行中であることを報告した。韓国では、国際理解教育が国家競争力の強化教育として位置付けられ、そのための外国語の強化を通しての生徒の育成、外国の有名な教育機関や国際機関との連携強化が提唱されている現実について報告した。

以上のシンポジストからの報告を受けて、ディスカッションの佐藤郡衛氏（目白大学）から各シンポジストに対してコメントと質問が提出され、フロアのオーディエンスを巻き込んで活発な討論が展開された。当日は、公開シンポジウムであったため、周辺大学の関係者や後援をいただいた八王子国際協会、及び八王子市内の学校関係者の参加もあり、盛況のうちにシンポジウムを終えた。

本シンポジウムについては、共催した中央大学のホームページでも大きく紹介された。

(<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2015/06/3863/>)



第25回研究大会・特定課題研究報告

名古屋市立蓬来小学校 林 敏博

今回のセッションでは「国際理解教育における実践研究のモデルを探る」というテーマで、これまで公開研究会を開くなど、本学会と連携して取り組みを進めてきた兵庫県立尼崎小田高等学校と武蔵野市国際交流協会（MIA）の事例を手がかりとして、林敏博、菊地かおり氏（筑波大学大学院）の司会のもと、研究・実践委員会委員長の嶺井明子氏（筑波大学）の趣旨説明につづき、実践研究のモデルを以下の3つのステップで探りました。

第1のステップでは、本学会の担当者と当該実践者がチームを組み、当事者性を確保しつつ、実践者が自らの実践をどう客観化することができるのか、それを協働的に探る試みを行いました。始めに、井ノ口貴史氏（京都橘大学）、小林哲氏（兵庫県立尼崎小田高等学校）から、尼崎小田高等学校の国際探求学科で行っている「国際探求」や「21世紀の国際理解」での授業を通して、グローバル 이슈に積極的に立ち向かい、解決に向けて行動をとる人材の育成につながったとの報告がなされました。グローバル 이슈とその解決に向けて活動を続けるゲストと身近に接しながら、仲間と協働的に学び、その解決に向けての提案を考えて社会に訴える行動を組織していく学びの有効性が確認されました。

次に、山西優二氏（早稲田大学）、村田敦史氏（武蔵野市国際交流協会）から、地域の多文化化が進む武蔵野市において、武蔵野市国際交流協会が中心となって地域課題に即した協働的な学びを生み出し、その学びの循環から、実践者自身がコーディネーターの役割と専門性を発揮しながら実践研究コミュニティを形成していったプロセスについて報告がなされました。

第2のステップでは、本課題研究に取り組む実践者同士の知見の共有と理論的模索の継続性の担保を図るため、昨年度の大会で実践報告をした当事者と理論的枠組みを提起した論者が、2本の報告へのコメントを行いました。始めに宇土泰寛氏（椋山女学園大学）からは、小林氏の実践報告の中で女子生徒の変容を追っていくこと自体が研究的実践者であり、そこからさらに変容をつなげていこうとすることが研究的実践者としての自立に結びついているとのコメントと、昨年度のご自身の椋山女学園大学附属小学校での実践発表も踏まえ、自分の実践を客観化させてそれを周りの他者に伝え、広げていくことによって、学校の中に実践研究コミュニティを形成していくことができるとの提案がなされました。

渡部淳氏（日本大学）からは、実践的研究者・研究的実

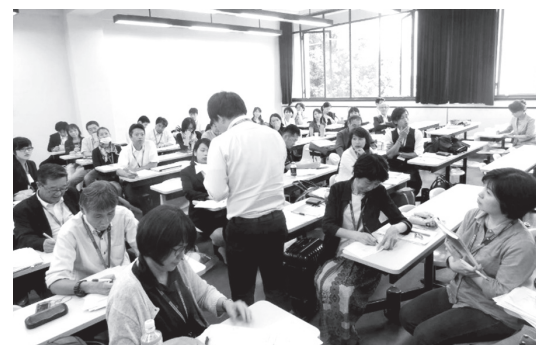
践者の特質として、①実践の中から課題が設定されること、②課題と格闘する過程において実践研究の豊饒化と理論化が同時進行していくこと、③研修と研究が不可分の関係にあること、という3つの点があげられました。また、実践的研究者・研究的実践者には理論構築から実践・検証までを一貫した問題意識で追求でき、実体験を通して研究成果を言語化できるなどの実践研究の特権性があるという提言がなされました。

第3のステップでは、「実践研究のコミュニティはどのように形成されるのか」、「研究的実践者・実践的研究者としての自立にむけた道筋がどのようなものなのか」の2つのトピックについてグループに分かれて討論を行いました。昨年に引き続き、互いの実践を紹介しながらテーマを深めるというスタイルで活発に話し合い、その後、グループで話し合われた内容を発表し、互いの考えや思いをシェアすることができました。

最後に、大津和子氏（北海道教育大学）より、一人ではできないことも誰かとつながることによってできるようになり、互いの関係性の中で実践研究のコミュニティが生まれ個人の自立にもつながるといった総括がなされ、3時間のセッションを終えました。



第1ステップ 提案風景



第3ステップ グループ討論後の発表風景

第25回研究大会参加記

国際交流基金日本語国際センター 大船ちさと

私は主に海外の中等教育段階の教科教育としての日本語教育にこれまで携わってきた。海外の中等教育機関がフィールドだったこともあり、国際理解教育学会の活動には関心を持っていたのだが、研究大会に参加したのは今回が初めてだった。昨年フィリピンから帰国し日本国内の学校教育現場で今まに行われている実践を学びたいと思ったことに加え、グローバル・シティズンシップの育成、国を越えた協働プロジェクトといった関心のあるテーマの発表が多数プログラムにあったことが、参加を決めた大きな理由である。簡単に感想をまとめたい。

まず、公開シンポジウムでのグローバル人材、グローバル・シティズンシップ、グローバルリーダーという語をめぐった議論が興味深かった。個人の資質・能力なのか、国益に還元されるべきものなのか、公平性と競争力という矛盾したものがそれらの語の中に含まれていないかといった議論は非常におもしろく、これらの議論が今後、どのような実践に結びついていくかを楽しみにしたいと思うと同時に、自分自身も実践に活かしていきたいと思った。

また、シンポジウム、自由発表の中での、SGHやIBといった枠組みの下に行われている実践報告も新鮮だった。海外の教科教育として行われる日本語教育は、日本のSGHのようなグローバルリーダーの育成を目指したカリキュラムの指定校で行われることも多い。こういった学校で日本語教育に取り組む教員も教科教育の中でどのようにグローバルに活躍できる資質・能力を育成することができるか、試行錯誤をしている。海外の日本語教育に携わる教員と日本の学校教員の交流などをもっと行っていけないだろうかなどと考えながら、発表を聞いていた。

参加して終わるのではなく、参加したことで始まる。始める。そういう気持ちになれたことが、今回の最大の収穫だったように思う。多くの知見を共有して下さった会員の方々に御礼申し上げたい。



第25回研究大会参加記

初めての世界に触れて

帝京大学教育学部4年 東 優也

今回、初めて参加し、準備・運営をはじめ発表やシンポジウムにて多くのことを学ばせて頂いた。現在、私は国際理解教育に興味を持ち、大学で勉強し始めたばかりの身であるが全国各地、海を越えて勉強できる場に居合わせることで視野を広げる契機となった。

まず、準備・運営では教室掲示や配布資料準備等、多くのことを通して、学会の運営の大変さや不規則に起こりうる事態への対処、運営スタッフ間の情報の共有の大切さ、遠方から来られる先生方が分かりやすいような誘導や教室の運営に責任を持ち、刻々とすぎる時間の中で事を進めることの難しさを感じた。学会という世界をこういった立場で知ることができ、大変勉強になった。

次に1日目に行われたシンポジウム「グローバル・シティズンシップの育成と国際理解教育」に参加し、激動の社会に対して教育がどのように対応するのかという視点で聞いていた。正直なところ、私にはついていけるような内容ではなく、非常に難しいと感じたが、国際理解教育を通して主体的に学ぶことが重要であり、学会に参加し、分からないけれど分からないなりにっていくことを続けていきたいと素直に感じた。

さらに、今回は自由研究発表ならびにポスターセッションでの発表も経験させて頂いた。研究的視点を持ち、教育活動に関わることや、客観的に教師と児童のやり取りを観察することなど、どの様に研究を伝えていくのかを考える経験となった。右も左もわからない中で挑戦させて頂いたことを中山京子先生、居城勝彦先生に深く感謝するとともに、今後も継続した研究や実践報告ができるようになりたいと思う。また自分が勉強できる土俵を見つけることができたことを嬉しく思う。

最後に、記念すべき25回大会を準備・運営をしていただきました実行委員長の森茂岳雄先生と中央大学の関係の皆様方、埼玉大学の桐谷正信先生、中央大学の学生の皆様方に心から感謝申し上げます。



2015（平成27）年度総会報告

6月13～14日に中央大学において開催された2015年度の第25回研究大会時の総会において、2014年度の事業報告・決算報告ならびに2015年度の事業計画・予算計画が審議され、承認されましたので報告します。

2014（平成26）年度事業報告

1. 第24回研究大会開催

日本国際理解教育学会第24回大会は、奈良教育大学を会場に2014年6月14日（土）・15日（日）の2日間にわたって開催され、自由研究発表、公開シンポジウム、特定課題研究などのプログラムが実施された。参加者は、両日を通じて、会員・非会員を含めて延べ約230名であった。韓国、中国からの参加者もあった。自由研究発表では、48件の発表が行われ、海外の研究者9名による発表もなされた。二つの公開シンポジウムは「ESDと国際理解教育」「ことばの教育と国際理解教育」をテーマとし、後者のシンポジウムではギリシアからの研究者をシンポジストとしてお迎えするなど、国際性に富んだ研究大会となった。特定課題研究では、「国際理解教育における実践研究の視座」をテーマに、報告とワークショップが行われた。

2. 各委員会・事業報告

(1) 研究・実践委員会

- ① 学会大会・特定課題研究／於：奈良教育大学、2014年6月15日（日）
「国際理解教育における実践研究の視座」
※3年間の共通テーマ「国際理解教育における教育実践と実践研究」の第1弾企画。

② 公開研究会の開催

兵庫県立尼崎小田高等学校／2014年10月31日（金）
学校設定科目「21世紀の国際理解」（地歴公民科） 福田秀志教諭
学校設定科目「国際探求Ⅰ」（英語科） 小林哲教諭

(2) 紀要編集委員会

- ① 紀要20号の刊行 明石書店より2013年6月20日に刊行された。
- ② 紀要21号の編集・刊行
紀要「国際理解教育」21号の刊行（第25回研究大会での配布）に向けての編集作業がおこなわれた。
特集論文「教師教育と国際理解教育」、研究論文、実践研究論文、実践研究ノート、第24回研究大会シンポジウム報告、研究・実践委員会報告、国際委員会報告、博学連携教員研修ワークショップ報告、資料「ESDに関するあいち・なごや宣言を読み解く」、書評、新刊紹介などを掲載した。

(3) 国際委員会

- ① 海外スタディツアー
これまでのレビュー（2012：豪州、2013：スリランカ）、今後の可能性
- ② 外の国際理解教育に関する情報収集と発信
ESD(ESD)に関するユネスコ世界会議 → 個々の理事や会員が活躍。ニュースレター、紀要で情報発信。
GCED（仁川会議）

③ 公開学習会を通じた情報提供と拡散

- 第4回 ESD公開学習会の主催（2014年7月30日（水）午後4時～6時半）
安彦忠彦講演「持続可能な社会と学力：現行及び次期学習指導要領をめぐって」
- 第5回 ESD公開学習会の主催（2015年1月24日（土）午後3時～6時）
永田佳之講演「『国連ESDの10年』の成果と課題：宣言文及び最終報告書の要点を読み解く」

④ 日中「異己」共同授業プロジェクトの検討 枠組みと国内実施体制の検討

⑤ 韓国国際理解教育学会との交流

- 両国学会間の各種コーディネート
韓国学会への参加：藤原会長他6名、会員の参加と交流

3. 韓国国際理解教育学会への参加

- ・韓国国際理解教育学会第15回大会（キーワードはGCE）
- ・期日：2014年11月22日～23日
- ・会場：APCEIU（ソウル市内）
- ・本学会からの参加者：7名

4. 国立民族学博物館との共同事業

- (1) 博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育：センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむ」
 - ・日時：2014年8月5日（火）
 - ・場所：国立民族学博物館
 - ・参加者：70名（ワークショップ関係者を除く）
- (2) 「博学連携教員研修ワークショップ」報告書作成検討

5. ユネスコアジア文化センターとの共同企画 大津和子編

『日韓中でつくる国際理解教育』（明石書店）の出版

6. 理事会開催

- （常任理事会） 臨時：2014年10月4日（東京）
第1回：2014年12月20日（東京）
第2回：2015年3月30日（東京）
- （理事会） 第1回：2014年6月13日（奈良）
第2回：2014年12月20日（東京）

7. 事務局報告

- (1) 会員動向（2015年3月31日現在）
会員総数：455名（正会員403名、学生会員45名、団体会員7団体）
2014年度入会者37名、退会者23名
- (2) 会報発行 vol.44、vol.45、vol.46

以上

平成26年度 日本国際理解教育学会収支決算書（平成26年4月1日から平成27年3月31日まで）

I. 収入の部

科 目	25年度決算額	26年度予算額	26年度決算額	備 考
入会金	69,000	70,000	105,000	(35名)
年会費	3,128,000	3,200,000	3,162,000	(正352、学生34、団体7)
助成金	0	1,000,000	1,000,000	公文国際奨学財団（別会計）
雑収入	39,731	40,000	13,168	紀要・報告書販売・印税、利息
当期収入合計（A）	3,236,731	4,310,000	4,280,168	
前期繰越収支差額	2,949,091	2,941,799	2,941,799	
収入合計（B）	6,185,822	7,251,799	7,221,967	

II. 支出の部

科 目	25年度決算額	26年度予算額	26年度決算額	備 考
1. 事業費	2,826,321	3,940,000	2,578,483	
大会運営補助費	400,000	400,000	400,000	中央大学へ
紀要委員会費	174,930	180,000	177,854	Vol.21編集費
紀要刊行費	500,000	500,000	500,000	Vol.20刊行費（買い取り分）
会報刊行費	73,080	210,000	178,178	Vol.44,45,46号刊行費
理事会費	715,780	700,000	142,991	理事会2回・常任3回（臨時を含め）
研究・実践委員会費	500,000	500,000	339,254	
国際委員会費	300,005	300,000	273,544	
国立民族学博物館との共同事業	79,326	90,000	63,673	
国際交流費	53,200	60,000	60,000	
学会賞	30,000	0	0	
公文助成金	0	1,000,000	442,989	
2. 管理費	417,702	360,000	217,753	
事務局経費	47,540	50,000	32,760	理事会弁当代（20,000）を含む
人件費	26,000	60,000	28,500	紀要・ニューズレター発送アルバイト
名簿作成費	0	0	0	
通信費	126,540	150,000	117,951	紀要・ニューズレター郵送料
設備・備品費	15,545	10,000	0	プリンター、金庫
消耗品費	21,451	30,000	15,917	事務用品
会議費	29,106	30,000	7,225	理事会会場使用料
旅費交通費	29,800	10,000	0	監査旅費・理事会準備旅費など
印刷製本費	106,050	0	0	封筒印刷費
教育関連学会連絡協議会年会費	10,000	10,000	10,000	年会費
雑費	5,670	10,000	5,400	振込手数料他
選挙管理委員会費	0	0	0	24年度決算額は、109,094円。
3. 予備費	0	630,000	449,280	HPのリニューアル

	25年度決算	26年度予算	26年度決算
当期支出合計（C）	3,244,023	4,930,000	3,245,516
当期支出差額（A）－（C）	△7,292	△620,000	1,034,652
次期繰越収支差額（B）－（C）	2,941,799	2,321,799	3,976,451

2015年度（平成27年度）事業計画

1. 各委員会等の事業計画

(1) 研究・実践委員会

① 学会大会・特定課題研究／於：中央大学、2015年6月14日（日）

「国際理解教育における実践研究のモデルを探る」

※3年間の共通テーマ「国際理解教育における教育実践と実践研究」の第2弾企画。

・兵庫県立尼崎小田高等学校の事例

小林 哲（兵庫県立尼崎小田高等学校）

井ノ口貴史（京都橘大学）

・武蔵野市国際交流協会の事例

村田 敦史（武蔵野市国際交流協会）

山西 優二（早稲田大学）

② 公開研究会の開催

・「地域実践からみる実践研究の必要性と方向性」

会場：早稲田大学、2015年4月11日（土）

実践事例報告者：村田敦史

（武蔵野市国際交流協会）

三田善雄

（みた農園、フードバンク岡山）

磯野昌子

（豆子フェアトレードタウンの会）

話題提供者：南雲勇多（早稲田大学大学院）

コーディネーター：山西優二（早稲田大学）

・兵庫県立尼崎小田高等学校／2015年10月23日（金）

国際探求学科「Global Studies」（総合的な学習の時間、英語科）小林哲教諭

学校設定科目「21世紀の国際理解」（地歴公民科）

福田秀志教諭

・神戸大学附属中等教育学校（予定）

(2) 紀要編集委員会

紀要22号（特集「道徳教育と国際理解教育」）の編集と刊行。

(3) 国際委員会

① スタディツアーの開催（実施は2015年度末か2016年度前半）

ニーズの検討

担当者の負担（財政・時間等）

予算的にも自立的な運営が可能な方法で定着できるかどうか課題

② 海外の国際理解教育に関する情報収集と発信

ポストDESD（グローバルアクションプログラム）、MDGs, SDGsなど

③ 韓国国際理解教育学会との交流

中央大学での大会（2015年6月13日～14日）

韓国国際理解教育学会大会（於江原大学校）への参加

（2015年10月31日～11月1日）

④ 日中「異己」共同授業プロジェクトの推進

(4) 国立民族学博物館との共同事業

・今年度は博学連携教員研修ワークショップを行わず、ワークショップの10年を振り返るための報告書の作成を行う。

(5) 役員選挙の実施について

・2016年11月 投票用紙の送付

・2016年12月 開票作業

＜報告＞

(1) 『国際理解教育ハンドブッカーグローバル・シティズンシップを育むー』（明石書店）の刊行

・学会創設25周年記念事業として『グローバル時代の国際理解教育ー実践と理論をつなぐー』（明石書店、2010年）以降の最新の研究成果をもとに執筆。

・編集・発行に当たっては、公文国際奨学財団からの助成金を充てた。

(2) 第26回研究大会開催校について

・上越教育大学（実行委員長：釜田聡）

・日程：2016年6月中旬～7月中旬で調整中

以上

平成27年度 日本国際理解教育学会収支予算書（平成27年4月1日から平成28年3月31日まで）

I. 収入の部

科 目	26年度決算額	27年度予算額	備 考	26年度予算額
入会金	105,000	70,000		70,000
年会費	3,162,000	3,100,000		3,200,000
助成金	1,000,000	0	公文国際奨学財団	1,000,000
雑収入	13,168	15,000	紀要販売、利子等	40,000
当期収入合計 (A)	4,280,168	3,185,000		4,310,000
前年度繰越収支差額	2,941,799	3,976,451		2,941,799
収入合計 (B)	7,221,967	7,161,451		7,251,799

II. 支出の部

科 目	26年度決算額	27年度予算額	備 考	26年度予算額
1. 事業費	2,578,483	3,357,011		3,940,000
大会運営補助費	400,000	400,000	28年度・26回大会へ	400,000
紀要委員会費	177,854	180,000	Vol.22編集費	180,000
紀要刊行費	500,000	500,000	Vol.21刊行費	500,000
会報刊行費	178,178	140,000	Vol.47、48刊行費	210,000
理事会費	142,991	700,000	理事会 2 回 常任 3 回	700,000
研究・実践委員会	339,254	450,000		500,000
国際委員会	273,544	300,000		300,000
国立民族学博物館との共同事業	63,673	70,000		90,000
国際交流費	60,000	60,000		60,000
学会賞	0	0		0
公文助成金	442,989	557,011		1,000,000
2. 管理費	217,753	510,000		360,000
事務局経費	32,760	70,000		50,000
人件費	28,500	70,000		60,000
名簿作成費	0	0		0
通信費	117,951	150,000		150,000
設備・備品費	0	10,000		10,000
消耗品費	15,917	30,000		30,000
会議費	7,225	30,000	会場借料	30,000
旅費交通費	0	10,000		10,000
印刷製本費	0	0		0
教育関連学会学会連絡協議会年会費	10,000	10,000		10,000
雑費	5,400	10,000	振込手数料	10,000
選挙管理委員会費	0	120,000		0
3. 予備費	449,280	30,000		630,000
当期支出合計 (C)	3,245,516	3,897,011		4,930,000
当期支出差額 (A) - (C)	1,034,652	△71,2011		△620,000
次期繰越収支差額 (B) - (C)	3,976,451	3,264,440		2,321,799

研究・実践委員会報告

早稲田大学 山西 優二

研究・実践委員会は、2013年度以降3年間の研究プロジェクト「国際理解教育における教育実践と実践研究」を進めてきている。その流れの中で、学会研究大会の特定課題研究として、「国際理解教育における実践研究の視座」（2014年6月）、「国際理解教育における実践研究のモデルを探る」（2015年6月）を実施し、また公開研究会として、「椛山女学院大学附属小学校実践」（2013年9月）、「兵庫県立尼崎小田高等学校実践」（2014年10月）、「地域実践からみる実践研究の必要性と方向性」（2015年4月）を開催してきた。今回の報告では、2015年4月11日に早稲田大学で開催された公開研究会の内容について報告する。

この公開研究会では、前年の学会研究大会の特定課題研究で「地域事例にみる実践研究の視点」として試行的に提示された5つの視点－①「課題設定に基づく学びの循環」、②「地域の機能・リソースの活用」、③「実践をつなぐネットワーク」、④「実践研究コミュニティづくり」、⑤「コーディネーターの役割」－を踏まえつつ、3地域の実践事例を実践者が自らの経験をもとに紹介し、さらには地域実践にみる学びを読み解く上での基本的な視点ともいえる多様な学習論に関する話題提供もはさみながら、「地域実践からみる実践研究の必要性とその方向性」について参加者間で検討し合うことをねらいとした。

登壇者は、「実践事例報告者」：村田敦史（武蔵野市国際交流協会）・三田善雄（みた農園、フードバンク岡山）・磯野昌子（逗子フェアトレードタウンの会）、「話題提供者」：南雲勇多（早稲田大学大学院）、「コーディネーター」：山西優二（早稲田大学）であり、30名が参加する中、積極的な協議を行った。

この協議の中からは、「実践研究上の課題」として、①地域実践にみる学びの捉え方、②地域にみる学びの循環のあり様、③多様な地域実践に即した多様な実践コミュニティ・実践研究コミュニティのあり様と関連性、④地域実践者・地域コーディネーターの役割・専門性、といった点が浮びあがり、さらには、経済のグローバル化に伴う格差の拡大、政治の右傾化など平和ではない現在の社会状況に地域実践・地域実践コミュニティはどのように対峙していくべきかという問題提示もなされたのである。

この公開研究会の成果は、6月に実施された学会研究大会の特定課題研究「国際理解教育における実践研究のモデルを探る」に引き継がれている。

紀要編集委員会報告

立命館大学 森田 真樹

紀要編集委員会では、年4回ほどの編集委員会と、必要に応じたメール審議等を通して、会員の皆様に、国際理解教育の最新の研究成果や情報の迅速な提供が可能となるよう、議論を重ねております。投稿者の皆様や査読をお願いいたしました会員の皆様のご協力により、本年度6月の研究大会の際には、『国際理解教育』第21号を無事発行することができました。第21号では、「教師教育と国際理解教育」を特集テーマとして編集いたしました。国際理解教育の実践をより高度なものとするためにも、指導者の育成は不可欠の課題と言えますが、掲載論文からは、国際理解教育の実践を担う教師の力量形成について、多様な観点からの知見を得ることができたと考えております。

次年度発行予定の『国際理解教育』第22号では、「特別の教科」としての導入が決定された道徳教育を取り上げ、「道徳教育と国際理解教育」を特集テーマとしますが、現在は、会員の皆様から投稿された論文の審査を開始した段階にあります。近接する内容でありながら、これまで十分な議論がなされて来たとは言えない、両者についての最新の研究内容が、22号では数多く掲載されることと思えます。一般投稿や新刊紹介なども含め、次年度の学会の際には、充実した内容の紀要が発行できるよう、編集委員会として取り組んで参りたいと思っております。

国際理解教育は、それ自体が広域な内容領域を含みますし、実践される場も多様でありますので、投稿される論考においても、使用される用語の概念定義、研究の方法論、実践の紹介の仕方など様々です。実践内容や実践者の多様性という国際理解教育の特徴に十分に配慮し、様々な研究者・実践者に開かれた学会紀要であるとともに、その一方で、学会としての固有性や学術的水準にも配慮しなければならないという、2つの大きな課題を同時に編集委員会は背負っていると言えるでしょう。この点は、毎回の編集委員会でも議論となり、1つひとつの論考を丁寧に読み解きながら、掲載可否の審議を進めております。

国際理解教育の研究をどう進めるべきなのか、どうすることが国際理解教育、または国際理解教育学会としての固有性を担保することになるのか。非常に難解な問いではありますが、この度、本学会が編集し発行した『国際理解教育ハンドブック』（明石書店、2015年）は、この難問に応えるための重要な指針となるでしょう。学会紀要『国際理解教育』とともに、ぜひ、本書をご一読いただき、国際理解教育の研究の深化と実践の高度化がさらに進むことを期待いたします。

国際委員会

国際委員会の今年度（上半期）の活動は、「国際的な情報の収集と発信」と「海外スタディツアーを通じた国際理解教育の推進」という同委員会活動の2本柱への取り組みに加え、日中共同授業プロジェクトを本年度より本格的に始動させました。以下、概略となりますが、主な活動内容についてお伝えします。

(1)日中「異己」共同授業プロジェクトの推進

本年から日中両国の参加校が決まり、双方の学校現場で使われる共通の問いの作成と、実際の回答の比較がはじまりました。さらに、5月の連休時に北京で共同セミナーを北京市首都師範大学実験学校を会場に開催しました（主催：北京師範大学国際・比較教育研究院国際理解教育研究センター、共催：北京市朝陽区教育研究センター）。また、6月には中央大学での大会にて自由研究発表にも臨みました。日本では、新潟県及び宮城県の先生方の全面的なご協力をいただいております。今後は、現場の先生の相互訪問を可能とする助成金の申請も検討し、数年にわたる継続事業へと育んでいく予定です。

(2)スタディツアーの実現に向けて

国際委員会では、「ESDの10年」を意識した海外スタディツアーを過去2度にわたり開催して以後、ニーズの把握や担当者の財政負担などについて検討を重ねてきました。本年度は戦後70年を踏まえ、中国でのツアーを実現するべく、検討をはじめています。開催時期は、2016年度前半（ゴールデンウィークを活用）になる予定です。詳細が決まりましたら、ホームページ等でお知らせ致します。

(3)海外の国際理解教育に関する情報収集と発信

国際委員会の委員には国連・日本政府・民間等の各レベルで「ESDの10年」に関わってきた委員が少なくなく、昨年11月に名古屋市で開催された「ユネスコESD世界会議」や、その前週に岡山市で開催された各種ステークホルダー会議等の成果や課題に関する情報をニュースレター及び学会紀要を通してお伝えしてきました。国内外

の各地で「ESDの10年」をスケールアップする事業としてスタートしているGAP（グローバル・アクション・プログラム）についても、ミレニアム開発目標後の新たな目標であるSDGs（サステイナブル開発目標）などの情報と共に収集し、会員の皆様との共有に務めてまいります。

(4)アジア諸国の国際理解教育学会との交流

中国及び韓国との国際理解教育学会間での交流が続けています。本年6月の中央大学での大会に両国の会員も参加され、これまで以上に親睦を深めることが適いました。また、韓国での大会のお誘いを下記の通り、受けております。ご関心のある方は国際委員会（釜田聡：kamada@juen.ac.jp）までご連絡下さい。

○第16回韓国国際理解教育学会

テーマ：Post2015世界市民教育：課題と実践

日時：2015年10月31日（土）～11月1日（日）

場所：江原大学校（江原道 春川市）

（文責：国際委員会委員長：永田佳之）

理事会報告

事務局

2015年度第1回の理事会が、第25回研究大会に合わせて2015年6月12日（金）に中央大学にて開催された。藤原会長、森茂副会長（第25回大会実行委員長）、中山副会長をはじめ理事13名と、事務局1名を含め計14名が出席した。主たる議題は、翌日の総会に諮る2014年度事業報告、決算報告、2015年度の事業計画、予算案の審議、各委員会からの活動報告及び、選挙管理委員の選出であった。（詳細については、「総会報告」参照。）

その他、学会のHPのリニューアルに関連し、リニューアル後は、委員会の長が責任をもって情報をアップすることになったほか、『国際理解教育ハンドブッケーグローバルシティズンシップを育むー』（明石書店）の刊行についても報告が行われた。また、選挙管理委員については、風巻浩会員、横田和子会員、石川一喜会員の3名が選出された。

博学連携事業報告

「博学連携ワークショップ10年の足跡をまとめる」

「博学連携教員研修ワークショップ」は10年の節目を過ぎ、2015年度は記録の作成に集中することになりました。『学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする—』（明石書店、2009年刊行）以降の展開を中心に、『国立民族学博物館調査報告（Senri Ethnological Reports）』（通称SER）としてまとめる編集作業を行っています。国立民族学博物館調査報告』とは、民博の研究者の各個研究、共同研究、機関研究などの成果を速やかに報告することを目的とし、特定の民族、地域、テーマに関する調査研究成果のうち、予備的報告を必要とするもの、文献目録、資料集成など、資料的性格をもつものを掲載しています。

この博学連携教員研修ワークショップでは、参加者、ファシリテーター、組織の成長の様子が見られました。例えばある参加者は、最初に参加したのは大学3年生で教職課程を履修していましたが、卒業して教師になっても継続して参加し、時には同僚の教師を誘って参加するようになりました。ワークショップで学んだことを、自分の教室での実践にとりこみ、子どもたちと学習活動を展開している事例も報告されています。また別の中堅教員は、複数年にわたって様々なワークショップに参加し、ワークショップで学んだことを地域の国際理解教育の研究会で報告をしたり、実践に組み入れたりしていることを報告しています。こうした時間をかけて成熟したワークショップの全体について、以下の構成で編集作業を進めています。

学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ（仮）

1部 博学連携への扉

- 1.1.文化人類学と学校現場をつなぐ—みんなの教育活動をふり返って—（森茂岳雄）
- 1.2.博学連携教員研修ワークショップ10年のあゆみ（中山京子）
- 1.3.博学連携教員研修ワークショップ10年のマネジメント（中牧弘允）
- 1.4.博物館と学校カリキュラム（田尻信壹）

2部 教員研修ワークショップ「博物館を活用した国際理解教育」

- 2.1.一粒のカカオから（織田雪江・鈴木紀）
- 2.2.「見方」を開発—インドの染織資料が見えてくる！（上羽陽子・佐藤優香）

- 2.3.さわっておどろく「手学問のすゝめ」（廣瀬浩二郎・五月女賢司）
 - 2.4.歌と踊りで語りつぐ南の島の物語（中山京子・居城勝彦・八代健志・林勲男・丹羽典生・ピーター・マシウス）
 - 2.5.民博シアター：展示から劇活動へ（小林由利子・森茂岳雄・山本直樹・菅瀬晶子・上羽陽子）
 - 2.6.織機のカラクリ大発見（上羽陽子・木村慶太・山田幸生）
 - 2.7.北西海岸先住民の木箱づくり（山田幸生・木村慶太・岸上伸啓）
 - 2.8.自分の希望を叶えるエケコ人形（木村慶太・山田幸生・中牧弘允）
 - 2.9.「すごろく教材」で異文化理解（東峰宏紀・宇治谷恵・朝倉敏夫・韓敏）
 - 2.10.「みんなつっく」で世界と教室をつなごう！（呉屋淳子・横山佐紀）
 - 2.11.ものづくりとiPadを用いた現地学習（今田晃一・林勲男・斎藤玲子・宇田川妙子）
- #### 3部 ワークショップをふりかえる
- 3.1.ワークショップをふりかえる場づくり（上田信行・佐藤優香・古川岳志・柴田元・津山直樹）
 - 3.2.ワークショップ10年をアンケートからふりかえる（藤原孝章）
 - 3.3.ワークショップから実践へ（吉村雅仁・西薫・高橋実穂・秋山明之・荒井芳廣・菅沼彰宏）
 - 3.4.<討論>課題と展望—研究と教育の狭間で—編者一同

資料 10年分のワークショップ・プログラム

編集委員：上羽陽子、中牧弘允、中山京子、藤原孝章、森茂岳雄

10年を経過することによって進歩と課題の双方が浮かび上がりました。進歩と課題は、関わってきた個人レベルにも組織レベルにも言えることですが、ここでは博物館一般ではなく民族学博物館という場で行われるワークショップであり、国際理解教育という特色をもつ教員研修の場であることなどから、通常の博物館ワークショップの進歩と課題とは異なる省察が必要です。そして10年という長期の取り組みについて深く論考する報告書を目指して編集作業を進めています。編集の特色として、

2部において、ファシリテーターとしてワークショップ運営をした担当者の原稿に、当日に民博から関わった研究者がコメントをするという、報告書の中でも協働を行っているところをあげることができます。ワークショップの成果や新しい可能性だけでなく、問題点も率直に記した報告書が、ワークショップの趣旨として掲げてきた「国立民族学博物館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して、国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考える」に応えることができれば幸いです。

(文責：帝京大学 中山京子)

<刊行までのスケジュール>

2015年4月末	第1次原稿提出
2015年5月17日	編集会議：リライト依頼他調整。(於：国立民族学博物館)
2015年5月末	第2次原稿提出、コメント原稿依頼
2015年8月7日	編集会議および討論会(於：国立民族学博物館)。討論記録作成依頼。
2015年9月3日	編集会議(中央大学)
2015年9月～10月	編集出版委員会申請へ向けた作業
2015年10月以降	申請・審査
2016年3月	刊行に向けて校正作業

事務局通信

日本国際理解教育学会第26回研究大会開催のお知らせ

- ・開催日程：2016年6月17日～19日
- ・開催会場：上越教育大学
- ・実行委員長：釜田 聡

新刊のご案内

日本国際理解教育学会編著

『国際理解教育ハンドブック
ーグローバルシティズンシップを育むー』(明石書店)

本書は、国際理解教育の歴史、カリキュラム開発、教育実践などを系統的に解説した格好の入門書です。ESD、学力と評価、コンピテンシーなどとの関連性、ユネスコ、欧米、東アジアにおける動向など、幅広い視野から国際理解教育をとらえ、今後の研究と実践の指針を示します。



寄贈図書

- 金漢宋著 國分麻里・金玠辰訳『韓国の歴史教育ー皇国臣民教育から歴史教科書問題までー』明石書店、2015年
- 佐藤学・多田孝志・諏訪哲郎・木曾功編著『持続可能性の教育ー新たなビジョンへー』教育出版、2015年

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様に関わられました図書、報告書、教材などがございましたら学会にご寄贈下さい。紹介させていただきます。

新 入 会 員

以下の26名、1団体が2015年10月9日までに入会を承認されました。

氏 名	所 属	氏 名	所 属
棚田 萌子	大阪府立大学大学院	的野 記子	
佐野真理子	池田市立北豊島中学校	伊藤 貴史	柏崎市立第一中学校
砂田 純志	筑波大学大学院	田口 秀行	上越教育大学附属中学校
金子 邦秀	同志社大学	間部 幸	日本大学大学院
カメダ・クインシー	玉川大学学術研究所	ブルカート・香織	金沢大学
由井 一成	日本女子大学附属高等学校	河野 裕之	小田原市立国府津小学校
瀬尾 匡輝	茨城大学留学生センター	西嶋 桃子	麴町学園女子中学校高等学校
安達 理恵	愛知工科大学	大野 恵理	横浜国立大学大学院
永田 裕之	東洋大学	関 愛	中越学園中越高等学校
前原 卓志	上越教育大学大学院	道本 祐子	宇部工業高等専門学校
井関 貴博	上越教育大学大学院	大山 正博	神戸大学大学院
小黒 淳一	上越教育大学大学院	神戸大学附属中等教育学校（団体会員）	
中川真菜美	上越教育大学大学院	品川 勝俊	兵庫教育大学大学院
中島 義和	お茶の水女子大学附属中学校	馬場 大樹	神戸大学大学院
工藤 泰三	名古屋学院大学		

事務局からの連絡とお願い

◆年会費納入のお願い

2015年度の会費をまだ納入されていない方は、できるだけ速やかな納入をお願いいたします。納入いただいた方には、学会誌『国際理解教育』Vol.21を御届け致します。

●正会員8,000円 学生会員4,000円 団体会員30,000円

●振込先（ゆうちょ銀行以外からの振り込みには店名、店番が必要となります）

ゆうちょ銀行から：記号00120-5、番号601555、加入者名 日本国際理解教育学会

他の金融機関から：店名〇一九（ゼロイチキュー）、店番019、預金種目 当座預金、

口座番号 0601555、加入者名 日本国際理解教育学会

◆住所・所属等変更連絡のお願い

ご所属、ご住所などに変更がありましたら、事務局までE-mail (jaie@tamacc.chuo-u.ac.jp) にてご連絡いただきたくお願いいたします。

◆学会誌『国際理解教育』バックナンバーの購入手続きについて

明石書店から発行されております『国際理解教育』の16号以降につきましては、お近くの書店にてご購入が可能です。それ以前の紀要につきましては、事務局にて販売致しております。在庫希少で販売できない号もございますが、ご購入をご希望の方はお気軽に事務局までお問い合わせください。会員価格でご購入いただけます。

◆フェイスブックのご案内

学会からの発信ツールとして、これまでのホームページ (<http://www.kokusairikai.com/>) に加え、あらたにフェイスブックを活用することとなりました。ご興味のある方は、是非フォローしてみてください。